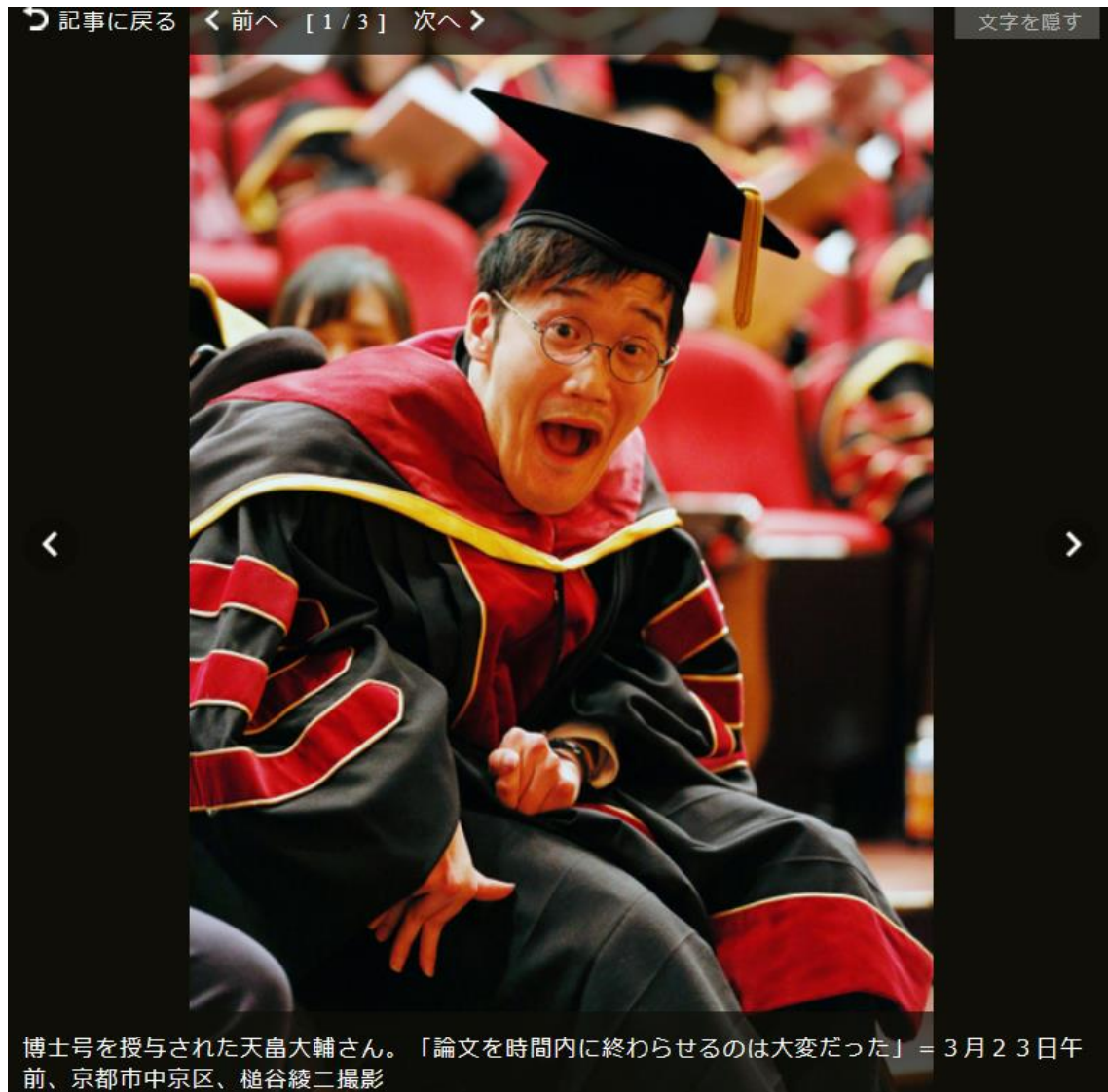


聴覚だけ頼りの 37 歳、博士号を取得 話せず読めずとも



ひとりでは動くことも、話すことも、読むこともできない天畠（てんばた）大輔さん（37）＝東京都武蔵野市＝が、聴覚だけを頼りに立命館大学大学院（京都市）で博士号を取得した。資料を読み、文章をともに考える介助者らの協力を得て、9年かけて完成させた。指導教員によると、天畠さんのように発話が困難な重度の身体障がいがある人が博士論文を書いたのは、世界的にみても極めてまれという。

天畠さんは14歳のとき、急性糖尿病で心肺停止状態になった。以来、聴覚は正常だが、四肢がまひし、言葉を発することができない。視覚は、色や立体はある程度わかるものの、文字は読めない。

自分の意思と関係なく体が動く不随意運動があるほか、時々あごが外れて息ができなくなるため、24時間の介助が必要だ。約20人が交代で介助に携わる。

当初は医師から「植物状態で知能は幼児レベルになった」と診断された。だが、半年後、母親がベッドに寝る天島さんが泣いているのを見て、何かを伝えたいのだと感じた。

「あ、か、さ、た、な……」と母親が声を出し、何度目かの「は」のとき、天島さんが舌の先を動かした。「は行ね。は、ひ、ふ、へ、ほ」と母親が続け、「へ」で天島さんが反応。1時間以上かけて、「へ・つ・た」と紡ぎ出した。経管栄養の袋が空だと気づいた母親が「おなかが減ったの？」と応じ、意思疎通の方法を獲得した。

以降、この「あ・か・さ・た・な話法」を使い、天島さんは肩や腕などを動かして意思を伝えている。

養護学校を卒業後、ボランティアの大学生らに家庭教師になってもらって2004年にルーテル学院大学（東京都）に2年がかりで合格。通学や授業のノート取り、食事、トイレなどに学生らの協力を得て、卒業した。10年に立命館大学大学院先端総合学術研究科に進んだ。

年に1、2回は大学院に足を運んだが、授業はインターネット電話を使って、主に自宅で受けた。12年には修士論文にあたる博士予備論文を完成させた。

天島さんは、自らが立ち上げた重度訪問介護事業所でヘルパーを募集。応募してきた学生やフリーター、介護職員などに、コミュニケーション法のほか、車いすの操作、飲食などの介助法を研修期間に学んでもらい、生活全般の介助を受ける。そうやって技能を身につけた介助者が辞め、途方に暮れたこともあった。

博士論文作成にかかわった介助者は約200人。そのうち21人が中心となって文献調べや国内外のインタビュー、論文執筆を支援。天島さんの論文執筆過程を分析した博士論文『「発話困難な重度身体障がい者」の新たな自己決定概念について』が完成した。

216ページ、20万字に及ぶ論文では、執筆を効率的に進めるには一文字一文字を紡ぐのではなく、天島さんの思考を理解し、先読みする力が「通訳者」に必要であることを示した。一方でいわばチームで書いた論文は「だれの業績なのか」との葛藤が生まれることも明らかにし、「グループによる思考」について論じた。

「みんなの力でここまでこられた」と天島さん。4月からは、日本学術振興会の特別研究員に採用され、中央大学（東京都）で発話困難な重度身体障がい者のコミュニケーションについて研究を続けている。「成果を出さなくてはというプレッシャーを感じる」と言いつつ、「学ぶことは僕の生きる道そのもの。将来は大学で職を得たい」と語る。（編集委員・大久保真紀）

中央大学の天田城介教授（社会学）の話

天島さんの博士号取得は、どんなに重い障がいがあっても博士論文を書くことが可能であることを示した。つまり、大学も大学院も障害を理由に入学は拒めないし、学位取得は困難とは言えないということだ。発話困難な重度障がい者である自分自身を研究対象とした彼の論文は、学術的に新しい領域を開拓したと言える。「発信されないこと」は「ないこと」になってしまう社会で、知を生み出す空間である大学や大学院がいかに健常者仕様なのかも示した。



博士号を授与された天畠大輔さん。「みんなで作った論文の象徴として自分が（博士号を）受けた感じ」と「あ・か・さ・た・な話法」で話した＝3月23日午前、京都市中京区、槌谷綾二撮影



博士号を授与された天畠大輔さん。「みんなで作った論文の象徴として自分が（博士号を）受けた感じ」と「あ・か・さ・た・な話法」で話した= 3月23日午前、京都市中京区、樋谷綾二撮影